

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

東ユーラシアという「辺境」の宗教とサブカルチャーから幸せと軋轢を考える〈基幹研究：東ユーラシア研究〉

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2023-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島村, 一平 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00010015">https://doi.org/10.15021/00010015</a>

# 東ユーラシアという「辺境」の宗教とサブカルチャーから幸せと軋轢を考える

島村 一平

モンゴル、シベリア、中央アジア。そしてロシアや東欧を含む「東ユーラシア」の国や地域は、かつてソヴィエト連邦を中心とした社会主義圏に属していた。また中国も政治体制としては社会主義体制を維持している。東ユーラシア研究の民博拠点では、これらの地域の「宗教とサブカルチャー」をテーマに研究を進めていく。

もう少し具体的にいうと、宗教やサブカルチャーが政治経済秩序とは異なる局面でグローバルな関係性の中でどのようにして人びとに希望を作り出しているのかという点に焦点を当てている。とりわけ旧社会主義圏においては、圏外に拠点を置く制度宗教（イスラーム、チベット仏教、カトリック、福音派など）や旧西側由来のニューエイジ思想、サブカルチャーといった「グローバルな文化」との接続が1990年代以降であったという点が特徴的である。

また中国においても改革開放以降に外来の宗教や文化と接続した点で共通している。こうしたポスト社会主義圏を中心とした東ユーラシアにおけるグローバル化のタイムラグを背景に当該地域の人びとが、新たに生み出す文化がいかに幸福を創り出し／文化衝突を生み出しているのかを明らかにする。また比較のために中国・旧ソ連圏以外の東南アジアの事例も入れるものとする。

## グローバル化のタイムラグ

東ユーラシアの人びとにとってのグローバル化とは、まずは欧米の文化一方向的な流入であった。マクドナルドにケンタッキー、コカコーラにマルボロ、ブルージーンズ。ハリウッド映画にロックやポップス、そしてヒップホップ。社会主義の崩壊とは、ある意味、旧ソ連圏で暮らす人びとにとって、欧米の映画や音楽、ファッションや嗜好品の不可逆的な流入を意味した。文化のフローは、明らかに欧米という中心から周縁たる旧社会主義圏へと向いていたといえる。

文化人類学のグローバル化論でもっとも参照されているアルジュン・アパデュライは、グローバル化はこうした中心-周縁モデルだけでは捉えきれない複合的で重層的、かつ乖離的な秩序だとする（アパデュライ 2004: 68-69）。つまりグローバル経済は複合的でアメリカがもはや人形遣いのようにイメージの世界システムを操ってはならず、ただ結節点のひとつとしてのみ、想像上のランドスケープの複雑でトランスナショナルな構築にかかわっているとい

うことだ（アパデュライ 2004: 66）。

しかしこうした多方向的なグローバル化は1990年代の旧社会主義圏では現象化していない。インド発祥のヨガが欧米で流行り、またインドに逆輸入されるような文化の環流（三尾 2015）も、少なくとも旧社会主義圏では起きていなかった。この地域のグローバル化には、タイムラグがあったのである。

## ポピュラー音楽の「辺境」としての東ユーラシア

ポピュラー音楽を事例にして考えてみよう。おそらくグローバル化は、アパデュライが予言したとおり、たしかに多中心的で重層的かつ乖離的に進行していったといえる。ただし1990年代初頭の旧社会主義圏は、ポピュラー音楽文化という領域において、二重の意味で周縁に置かれていた。まずは旧社会主義国という地政学的な周縁配置である。もうひとつは、ポピュラー音楽という領域自体が、アパデュライがいう意味での多中心的な「グローバル化」が非常に遅れており、それゆえに非西欧地域、とりわけ旧社会主義圏の東ユーラシア地域は19世紀の植民地時代と比べてさほど変わらない周縁に置かれているということである。

かつてはアメリカ発のMTV（ミュージックテレビジョン）は世界の音楽市場を寡占した（Banks 1997）が、デジタル化された音楽配信の時代になってもアメリカは今なおその中心性を全く失っていない。今も昔も欧米のポピュラー音楽は世界中で消費されるがその逆はほとんどない。もちろん80年代ワールドミュージック・ブームの中で、アフリカのポピュラー音楽がパリやロンドンを結節点にして西側諸国に拡散していくという動きもあった。

近年では、韓国のミュージシャンが欧米や日本で確固たる地位を築きつつある。しかしニューヨークやロス、そしてロンドンやパリといった欧米の都市以外にポピュラー音楽のグローバルな中心といえる都市がどれだけあるのだろうか。しかもワールドミュージックというマーケットの誕生は、第三世界出身のアーティストの独自性が国際マーケット側の要求するスタイルへと平準化させるプロセスでもあった（鈴木 2014: 483）。

こうした二重の周縁である旧社会主義圏の音楽が1980-90年代のワールドミュージックの流行にのることもなかった。例外的に一部の民族音楽好きによって馬頭琴やホーミーが消費されるようになって、サリフ・ケイタやユッサー・ンドゥ



モンゴルのヒップホップユニット、ICETOPの20周年ライブ  
(2017年、ウランバートル、筆者撮影)

ールのようなスターが旧ソ連圏から生まれることはなかった。つまりグローバルなポピュラー音楽の市場において、鉄のカーテンの向こう側の東ユーラシアの国々は、中南米やアフリカ以上に周縁に配置されていた。なぜなら旧植民地は宗主国とネットワークがあるが、「旧敵国」にはネットワークがなかったからだ。しかも旧社会主義圏諸国のアーティストたちは、最近まで英語やフランス語が話せる者が少なかった。旧社会主義圏はキューバのような一部例外を除くとポピュラー音楽界の「辺境」だったのである。

## 辺境ヒップホップ研究会

こうした状況を受けて、東ユーラシアの民博拠点では、現在、東ユーラシアを中心とした「辺境」のヒップホップを通してウェルビーイングや文化衝突を考える研究会を始めた。

そもそもヒップホップは、1970年代、アメリカのニューヨークのブロンクス地区のアフロ・アメリカンたちによって始められた文化の総称だ。それはDJ、ラップ・ミュージック、グラフィティ・アート、ブレイクダンスの4つのエレメントから成ると言われる。瞬く間に世界中に広まったヒップホップカルチャーは、アメリカ発の文化が単に受け入れられたということを意味するわけではない。それぞれのローカルな文化と融合を遂げながら、独自の「ヒップホップ」が生み出されているのである。たとえばモンゴルでは、口承文芸の韻踏み文化を基礎として独自のラップの技術が生み出されたり、馬頭琴やホーミーといった伝統楽器との融合がなされたりしてきた（島村 2021）。

またヒップホップ、とりわけラップが流行るということは、単純に音楽として聴かれていることを意味しない。アメリカ黒人たちが貧富の格差や人種差別を歌ってきたように、人間社会の矛盾がグローバルに共有されていることを意味するといってもよい。ニューヨークのブロンクスで起きた問題は、ロンドンのイーストエンドやウランバートルのゲル地区で起きる諸問題とも共鳴するのである。

つまりラッパーたちの叫び声は、その地域の人びとの怒りや哀しみ、喜びを知る上で重要な情報だ。まさにウェルビーイングや文化衝突を考える上でうってつけのテーマだといえよう。さまざまな国のラッパーたちの目線を見た、その地域の文化、社会の現実や世界の矛盾などを比較考察することで何が見えてくるだろうか。

### 島村 一平（しまむら いっぺい）

国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授。専門は文化人類学、モンゴル研究。著書に『増殖するシャーマン—モンゴル・ブリアートのシャーマニズムとエスニシティ』（春風社 2011年）、『ヒップホップ・モンゴリア—韻がつむぐ人類学』（青土社 2021年）、『憑依と抵抗—現代モンゴルにおける宗教とナショナリズム』（晶文社 2022年）などがある。



辺境ヒップホップ研究会第2回の参加者たち。研究者、ライター、ラッパー、編集者、多彩な人びとが集って議論した。(2022年9月、国立民族学博物館)

この研究会は、2022年11月末の時点ですでに3回の研究会を実施している。これまでにモンゴル、ロシア、ポーランド、タタールスタン、インドネシア、カメルーン、パレスティナ、ウクライナ、チベット、日本といった地域のヒップホップから見た社会にかかる発表がなされた。発表者の中には、研究者以外にインドのポピュラー音楽に詳しい軽刈田凡平（カル Катタ・ボンベイ）やポーランドのヒップホップに詳しいライターの平井ナタリア恵美といった方々もいた。またラッパーのダースレイダーやハンガー（GAGLE）、そして韻踏み組合のSATUSSYにヌマバラ山ポール、モンゴルのラッパーのKA といった人びとがゲストコメンテーターとして参加した。

## プロジェクトの今後

本研究のプロジェクトは、ヒップホップのみをテーマにしているわけではない。宗教の問題も重要だ。とりわけ東ユーラシア地域は、シャーマニズムやイスラームの力が強い。またモンゴルやロシアでは、チベット仏教が影響力を強めている。社会主義崩壊後、ニューエイジ思想の広がりや呪術の興隆にも目が離せない。こうした広義の「宗教」がもたらすウェルビーイングと文化衝突についても調査・研究を進めていきたいと考えている。

### 引用文献

- アバデュライ、A. 2004[1996]『さまよえる近代—グローバル化の文化研究』門田健一訳、吉見俊哉解説、東京：平凡社。  
島村一平 2021『ヒップホップ・モンゴリア—韻がつむぐ人類学』東京：青土社。  
鈴木裕之 2014『ワールドミュージック』国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp. 482-483、東京：丸善出版。  
三尾稔 2015『『環流』するインド』三尾稔・杉本良男編『現代インド6 環流する文化と宗教』pp. 3-24、東京：東京大学出版会。  
Banks, J. 1996 *Monopoly Television: MTV's Quest to Control the Music*. Boulder: Westview Press.